5　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私」は、絵画の恩師であるA氏の遺作展覧会に「窓」という絵を出品しようと、現在の所有者であるO夫人を訪ねた。この作品は、A氏の絵を理解するための鍵と呼ばれる不思議な絵だった。

夫人は私に椅子の一つをすすめ、それに私の腰を下ろしたのを知ると、①ほとんど唐突（とうとつ）と思われるくらい、A氏に関するさまざまな質問を、次から次へと私に発するのだった。私はもちろん、よろこんで自分の知っている限りのことを彼女に答えた。

のみならず、私は夫人に気に入ろうとするのあまり、夫人の質問を待とうとせずに、私だけの知っているA氏の秘密まで、いくつとなく洩らしたくらいであった。たとえば、こういうことまでも私は夫人に話したのである。――私はA氏とともに、第何回かのフランス美術展覧会にセザンヌの絵を見に行ったことがあった。私たちはしばらくその絵の前から離れられずにいたが、その時あたりに人気のないのを見すますと、いきなり氏はその絵に近づいて行って、自分の小指を唇で濡らしながら、それでもってその絵の一部をしきりに擦っていた。

私が思わずそれから不吉な予感を感じて、そっと近づいて行くと、氏はその緑色になった小指を私に見せながら、「こうでもしなければ、この色はとても盗めないよ」と低い声でささやいたのであった。……

私はそういう話をしながら、A氏について異常な好奇心を持っているらしいこの夫人が、いつか私にも或る特別な感情を持ち出しているらしいことを見逃さなかった。

そのうちに私たちの話題は、夫人の所有している氏の作品の上に落ちて行った。

私は、さっきから待ちに待っていた②この機会をすばやく捕らえるが早いか、私の用件を切り出したのである。

するとそれに対する彼女の答えたことはこうであった。「あの絵はもうA氏の絵として、世間の人々にお見せすることはできないのです。たとえそれをお見せしたところで、誰もそれを本物として取扱ってはくれないでしょう。なぜと言いますと、あの絵はもう、それが数年前に持っていたとおりの姿を持っていないからです。」

彼女の言うことは私にはすぐ理解されなかった。私は、ことによるとこの夫人は気の毒なことにすこし気が変になっているのかも知れないと考え出したくらいであった。

【堀　辰雄「窓」より】

問1　―線部①ほとんど唐突（とうとつ）と思われるくらい　とありますが、この時の夫人の気持ちに最も近いものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　A氏の作品を他人に見せたくないと思うあまり、絵から話題をそらそうと考えている。

イ　A氏の関係者に話が聞けることを喜び、A氏の情報を一刻も早く知りたいと思っている。

ウ　A氏が死んでしまった悲しみを共有するために、早く「私」と話したいと思っている。

エ　A氏の弟子がどれくらいA氏のことを知っているのか試し、だまそうと思っている。

問2　―線部②この機会　とありますが、これはどのような機会ですか。解答欄に合うように、文章から十三文字で書き抜きなさい。

	について話す機会。